

表佐という地名の由来

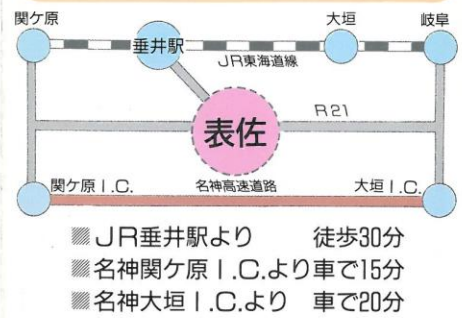
地名は時代によって変遷をとげています。おその地名の由来には次の三つがあります。

日佐：奈良時代に百済から人が移り住んで通訳をしていたらしくその人達を日佐氏といったところから日佐氏の住んでいるところを日佐といいました。

袁佐：平安時代には和名抄漢和辞典に美濃国不破郡袁佐と書かれていました。

表佐：室町時代から表佐になり、現在に至っています。やはり百済の帰化人の関わりが深いようだとはいわれています。

このように、地名から私たちの祖先に思いを馳せることができます。



お問い合わせは

表佐公民館

〒503-21 岐阜県不破郡垂井町表佐1496-5
 TEL (0584) 22-1011

*ぜひ お越しください。お待ちしております。

防火地蔵



むかし、何日も大雨で荒れた相川の濁水が引いた川底にきらりと光る物がみつかりました。よくみると、防火地蔵さんだったのです。村人は、さっそくお堂を建て、お地蔵さんにお守りをしてもらいました。ある日ひとりの落武者が風呂呂に入れてくれとやってきました。気持よく風呂呂に入った落武者は、急にびびり出して姿を消してしまいました。びびりした尼僧はその場で気を失ってしまいました。が、しばらくして気がつくとかまどの火がきれいに消されていました。その話から「お堂のお地蔵さんが消したんだ」ということになり、防火地蔵さんとしてあがめるようになりました。

千句の里

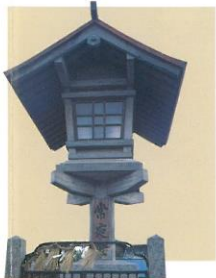


文明八年（一四七六）表佐の阿弥陀寺にて、連歌の巨匠・飯尾宗祇ら一六名が連歌の会を催しました。その当時、美濃十花千句」といわれていました。のちに、表佐千句、河瀬千句とも呼ばれ、この地を「千句の里」とも呼ぶようになりました。連歌の特徴は五七五にはじまり、脇句として七七五つけ、更に五七五をつけ更に七七五をつけてゆくという前句の情景にあり、あと句をよんてはつけ加えていく歌でありました。今では、毎年春に千句の里顕彰句会を開き、句会は毎月行なわれています。

「表佐千句」
（第一の初折表八句裏一四句）
何人 第一

- ①花を雲かけても 吹くな天津風 宗祇
- ②月ほのかなる 春の夕山 宗祇
- ③雁帰る遠方しるく 雨晴れて 紹水
- ④浪の名残の 寒き江の水 甚昭
- ⑤漕ぎ出し小舟の跡の 明くる夜に 俊重
- ⑥いづくの里ぞ 鐘響く空 清玉
- ⑦移りゆく松の風を 野に聞きて 氏忠
- ⑧高根を見れば 日の残る影 正玄

表佐湊



湊の位置は未だ確定されていません。今となっては、各考察からてしか説明がなされませんが、天正一四年（一五八六）時の豊臣秀吉は京に大仏殿や伏見城を建てたために各方面から用材の伐出を割当てられ河川が重要な交通機関でありました。木曾川から伊保を経て揖斐川、相川、泥川まで上り、表佐湊（二つ又）で陸揚げされ運んだといわれています。このようにして、一六六〇年ころまで利用され、その後は衰退していったようです。

鬼塚古墳



むかし、夜になると大きな太鼓の音がして鬼が現われ人々を困らせたそう。そこで南宮山の高山大権現が巨大な石を投げつけてその鬼を退治しました。その後、鬼の骸骨が埋められて塚となりました。人々はこの塚を鬼塚と呼ぶようになったのが始まりとされています。又、その後疫病で里人が多数苦しんだとされその疫病が鬼で、疫病を封じ込んだ塚が鬼塚であるともされていますが、ともあれ県道跡地図にも今もなお前方後円墳として記されています。

細雪

「細雪」の著者、文豪谷崎潤一郎は、昭和一四年頃、表佐の飯沼家に滞在したといわれています。源氏螢の乱舞を目の前にし、そのシーンを雅やかな風俗絵巻に封じこめました。飯沼徹因庵は、現在なくなっていますが、別棟の「關河亭」は明治四〇年に飯沼武一郎氏によって建てられました。移築されて、白鳥町長流の若宮家に現存しています。

松井永貞の墓



刀匠であった松井永貞は江戸時代末期に新刀作興下の名人といわれました。当時、刀鍛冶治道永の弟子となり、鉞や鉞を作っていました。その後、独学で鍛冶を研究し独自の鍛刀法を開発、南宮神社宝物殿には慶応三年に江戸で作った八〇cmの長刀一丁が保存されています。明治二年この世を去り、現在、夫婦の墓として残っています。

表佐太鼓踊り

太鼓踊りは雨乞いの信仰に始まります。元和のころ大早魃になると神に降雨を祈願しました。宝暦二年（一七二二）には、あまりの日照りに南宮の神に「南宮のお山に神を飾り、いざや勇みの拍子をとりにて不思議の雨を下さると」と、毎夜踊り祈りました。願いがかなって雨に恵まれた日には、村中総出て一日かけて南宮神社、仏宮の神明神社、地蔵の神明神社に礼踊りを奉納しました。現在は毎年八月一五日の地蔵祭、一〇月二日の表佐祭に恒例行事として受け継がれています。

ハリヨ



湯壺といわれる湧水池から清浄な水が山田川に流れています。その他の湧水池の流水域にもハリヨオの仲間ハリヨが生息していました。この淡水魚は一五℃位の清水、砂泥質の水底に住む魚で、体長四、六cm位。体には上下に五本のトゲが出て、そのトゲが特長です。また、この魚は水草で巣をつくり、子育てをするので有名です。現在は湯壺の東方に湧水池をつくり、そこでもこの魚を見ることが出来ます。

薬師寺



一〇〇〇年以上前、百人一首でおなじみの歌人、在原業平によって創建されたお寺です。その後江戸時代初期に曹洞宗大本山永平寺の金毛金威禪師を特請し、住山され、以後永平寺直末在原山薬師寺となりました。山号は開基した業平朝臣にちなみ、在原山が用いられています。

表佐英魂碑



旧表佐村には東西二ヶ所に火葬場がありましたが、個人的に墓碑を造る習慣がまだなかったため、火葬場の灰や人骨を集めて合同墓碑を大正七年に造られ、昭和六年に改修されました。それが、現在の祖先同胞碑なのです。中央の六角塔には当時の各宗派本山の管長者による法名が六角に刻まれており、下壇には部落別の法名入れが造られて、毎年物故者の法名が納められています。毎年八月一〇日の例祭には先祖の追悼・供養が盛大に行なわれています。

勝宮古墳



今から一五〇年くらい前、表佐の大門に生まれた力士で、大関（今の横綱）になりました。大変な力もちで、四〇貫（一五〇kg）の材木を一人でかついたそうです。お墓は富田孫一宅にまつられており、当時の番付表とさかすきピアセンターに展示してあります。

勝神社の北側につくられた古墳で、前方が四角で後方が円形の前方後円式の格式高い古墳です。時代としては六世紀から七世紀初めにつくられたとされています。